

最近、想うこと

ちゅう
忠

さとし
聡

さる11月8日、新潟市で新潟新聞社と共同通信社が主催した農業問題シンポジウム「21世紀 食糧は大丈夫か——考えよう日本のコメ、新潟のコメ——」に、パネラーとして参加してきた。

このテーマは、イタリアのローマで開催される『世界食糧サミット』を契機に、コメのあり方を考えてみようとの意図から、現状と将来展望、そして何をすべきかを見出そうというものである。

パネラーは、古野雅美（農村開発企画委員会専務理事）・堀江昭雄（新潟県農林水産部長）・井部辰男（上越アグリントピア研究塾事務局長）の各氏とわたし（神林カントリー農園代表取締役）の4名で、コーディネーターは佐藤準二（新潟日報編集委員）氏であった。

依頼を引受けたものの、正直なところわたしは、世界の食糧事情などということは全然考えたこともなく、事前に送られてきた資料を読んだり、にわかにテレビや新聞などに目をやってみた。するとどうだろうか、毎日のように飢餓で苦しむ人々の様子が報道されていることに、ようやく気付かされた。アフリカのルワンダ難民が、その程度もひどいと聞く。しかし、そうした現状に対して、わたしたちが何ができるのだろうかと思う。

はっきり言って、国内の農業展望さえまみならず、先行きの不安を抱えながら農業をしているのが現実だ。とはいっても、そうしたこともふまえて意見を述べろと云われ、恥を覚悟で臨んだ。

シンポジウムは、荏開津典生教授（千葉経済大学）の基調講演から始まった。

まず、地球上で食糧が満たされている地域は、世界人口の内およそ2割でその他の8割

は飢餓に瀕しているという。日本を含む先進諸国は、特別の区域であり、その責任で世界貢献をする必要があるのだそうだ。

言われてみれば、そうかもしれない。日本人は、世界中のあちこちから食物を取り入れて、飽食に浸っている。有り余る食べ物を無駄にもして、栄養過多から病気が発生する事態は異常なことだ。わたしも、そのひとりではあるが…。しかし、国民に今さら「食生活を改めろ」と言っても、改まるものでもない。講演によれば、日本は一年間に麦を400～500万トン輸入し、主にパンや麺類として食べているのだそうだ。それをやめて「ごはん」にすれば、今年のような300万トンもの余剰米はすぐに解消する。（理屈はそうだが、出来る話ではない…）

それに加えてやっかいなことに、コメの輸入量は、年々増加していくのだ。

わたしには、何が問題でそれをどうすればよいのか、まだ整理がつかないでいた。農家は、「土地を耕し、農作物を生産する」ことを使命としてきた。特にコメは、新食糧法が施行されたこともあり、消費者に受け止めてもらいやすいようにと、各地域や個人の競争が激化している。世界の食糧事情を念頭に置いた生産などという高等な考え方の持ち主は、ないに等しい。

荒廃が進む農地管理、高齢化と後継者難、生産調整などなど問題は山積している。このことは、国民全体のこととして、いろいろな立場や角度から検討する必要があるのだらうと、逃げるようにわたしは、会場を後にしてきた。

（新潟県神林村・農業）